「男、突っ走る！」

第117回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（25）　『オフィスツリーイン』代表
木内　孝志（54）　雅也の父
木内　真保（52）　雅也の母
木内　健次郎（21）　雅也の弟
眞榮田　浩平（25）　元名古屋芸術専門学校学生
福沢　瑞枝（25）　元名古屋芸術専門学校学生
長井　夏美（25）　元名古屋芸術専門学校学生／声の出演
加藤　直也（25）　元名古屋芸術専門学校学生
奥村　裕司（26）　元名古屋芸術専門学校学生／声の出演
国枝　佐代子（60）　『スリジェネ』総合プロデューサー
住吉　真由美（43）　『スリジェネアカデミー』ダンス講師
谷岡　典江（58）　『スリジェネアカデミー』演技講師
上島　譲治（36）　『スリジェネアカデミー』演技講師
上島　理絵（29）　『スリジェネアカデミー』演技講師
弘田　洸（24）　『スリジェネアカデミー』歌唱講師
本村　晴臣（55）　『スリジェネアカデミー』歌唱講師
加原　美穂子（36）　『スリジェネ』会計担当兼メンバー
林　亜里沙（13）　『スリジェネ』メンバー
赤澤　隆太（12）　『スリジェネ』メンバー
野倉　浩太（23）　元『スリジェネ』メンバー
富永　茜（24）　元『スリジェネ』メンバー
大坂　美央（18）　元『スリジェネ』メンバー／声の出演
河辺　真理恵（23）　元『スリジェネ』メンバー／声の出演
坂本　寿梨（21）　元『スリジェネ』メンバー／声の出演
月島　藍那（23）　元市民ミュージカル出演者／声の出演

1　木内家・雅也の部屋

パソコンで仕事をしている雅也。

N「コロナに感染したことが分かってからというもの、僕はスリジェネの運営を始め、仕事関係者に感染報告の対応に追われていました。正直感染したことよりも、この対応のほうが負担に感じていました。マスクも消毒も換気も気を付けていた自分がまさか感染するとは思ってもいませんでした。しかし、よくよく考えれば家の中ではマスクを取るし、家の中で感染しないとも言い切れません。どれだけ感染対策をしていても、今は誰しもが感染する可能性があることに、僕は身をもって実感しました」

2　同・居間

雅也がテレビを見ながら、スマホをいじっている――台所で洗い物をしている真保。

N「そこで僕は、ＳＮＳでコロナに感染した

ことを公表しました。当然、僕がＳＮＳで繋がっている友人や知人には、瞬く間にコロナに感染したことが広まっていきました」

真保が咳き込んでいる――怪訝そうな顔の雅也。

3　東京・オフィス・廊下

瑞枝が歩いている――途中にある男子トイレから直也が出てくる。

瑞枝「おはよう、加藤」

直也「（慌てたように）おい見たか、ＳＮＳ？」

瑞枝「何かあったの？」

直也「何も見てないのか？」

瑞枝「どうしたの？」

直也「木内、コロナに感染したって」

瑞枝「え……うっちーが……」

直也「弟経由で、家族全員感染したんだってさ。仕事のこともあって、公表する気になったらしい」

瑞枝「大丈夫かな？」
直也「さあ、詳しくは分かんないけど」
瑞枝「私たち東京組が、一番コロナに気をつけなきゃって思ってたけど、まさかうっちーがなるなんてな」
直也「同期の中では、あいつが初めてじゃないか？　コロナになったの」
瑞枝「そうだね……」
不安そうな顔の瑞枝。

4　神奈川・茜のマンション
玄関で靴を履いている茜。
茜「行ってきます」
と、スマホを持った浩太が慌ててやってくる。
浩太「茜、大変ッ……」
茜「どうしたの？」
浩太「これ見てみろよ（とスマホを見せる）」
茜「（スマホの画面を見て）え……うっちーが、コロナに感染……」

浩太「ああ」

茜「まさかうっちーが……」

浩太「愛知でも、結構増えてるとは聞いてたけど、うっちーが感染するなんて」

茜「私たちも、気を付けないとね」

浩太「感染予防って言っても、限界があるけどな……」

茜「とにかく、今はお互いに気を付けることね……じゃあ、行ってきます（と出ていく）」

浩太「行ってらっしゃい……」

5　木内家・居間

真保が段ボールを開けると、冷凍食事と冷凍ご飯を取り出し、電子レンジで順番に温め始める。

激しく咳き込んでいる真保。

×　×　×

食事をしている雅也、孝志、真保――

雅也、食べつつも味がしないため、険

しい顔をしている。

真保「やっぱり、味分かんない？」

雅也「うん。匂いもね」

孝志「元々この冷凍食事が、病人用の冷凍食だから薄味なんだろう」

雅也「薄いか濃いかも分からないの。昨日の晩、父さんが作ってくれた卵焼きだって、ただ味のしないスポンジを食べてる感覚だったし、（とみそ汁を飲むと）このみそ汁だって、暑い液体を飲んでるっていう感覚だけでこのみそ汁の味が濃いのかどうかも分かんないんだから」

真保「熱いとか冷たいっていう、感覚はあるわけだ」

雅也「そう。あくまで味覚だから、辛いのか、甘いのか、しょっぱいのか、苦いのか、そういうのが分からないんだよね。空腹状態のお腹に、とりあえず食べ物を詰めてる感覚だよ、今」

真保「（咳き込みながら）味覚障害って、長

く続く人もいるんでしょ。これから、どうなるかな」

孝志「おい、咳大丈夫か？」

雅也「今朝よりひどくなってない？」

真保「（咳き込みながら）そうかな？　あまり気にしてないけど」

雅也「毎朝、保健所から健康状態の確認の電話来るんなら、明日にでもその咳のこと聞いてみたら？」

真保「そうしてみる」

6　病院・リハビリセンター

患者たちが、それぞれスタッフの補助を受けながらリハビリを受けている――休憩中の浩平がスマホを見ている。

雅也のＳＮＳの投稿に気が付くと、

浩平「え……マジか……」

7　木内家・雅也の部屋

雅也がパソコンで仕事をしている――

スマホの通知が鳴り、浩平からのメッセージを確認する。

浩平の声「うっちー、大丈夫か？」

返信をする雅也。

雅也の声「ごめんね、心配かけてます。今のところ、味覚障害と嗅覚障害があるだけで、体調面は大丈夫だよ」

と、浩平から返信が来る。

浩平の声「いや、それでも辛いだろ。薬もないから、何とも言えないけど、早く良くなってくれよ」

返信をする雅也。

雅也の声「ありがとう」

Ｎ「ＳＮＳで公表をしたこの日、友人たちからは励みや心配のメッセージが多数届きました」

×　×　×

スマホを見ている雅也。以下、カットバック。

美央からの返信が来る。

美央の声「うっちー、大丈夫？　早く良くなってね」

×　×　×

寿梨からの返信が来る。

寿梨の声「大丈夫？　私の周りでコロナに感染した人がこれまでいなかったので、うっちーが感染したという話を聞いてます。早く元気になってね」

×　×　×

真理恵からの返信が来る。

真理恵の声「うっちー大丈夫？　まずはゆっくり直してね」

×　×　×

藍那からの返信が来る。

藍那の声「うっちー大丈夫？　年末会ったときは元気だったのに、突然のコロナ感染を聞いて驚いてます。早く元気になって、またひるちゃんと一緒にご飯行こうね」

×　×　×

裕司からの返信が来る。

裕司の声「うっちー大丈夫か？　正月、あけおめＬＩＮＥでお互いにコロナ気を付けようと話をしてた直後、こんな形でフラグ回収するなんて。大変かもしれないけど、まずはゆっくり休んでくれ」

×　×　×

夏美からの返信が来る。

夏美の声「うっちー、体調は大丈夫？　東京でも未だコロナが多い中で、うっちーが感染したという話を聞いて驚いてます。うっちーは物書きだし、情報発信が得意だと思うから、ぜひ体験談を発信してくれれば、私たちも参考になると思うんだ。考えてみてください」

×　×　×

パソコンでブログを更新している雅也。

Ｎ「もっと情報を発信してほしいと言う意見が多数出たため、僕は仕事で活用していたブログサイトに、備忘録として感染経緯やＰＣＲ検査、濃厚接触者の定義などを発信

し続けました」

∞中央公民館・会議室

佐代子、住吉、谷岡、譲治、理絵、洸、本村、美穂子が集まっている。

佐代子「今日は、皆さん臨時の会議に集まっていただき、ありがとうございます。ご存じかと思いますが、先日、うっちーがコロナに感染をしました。それについて、私たちスリジェネアカデミーでも、コロナについて今一度考える必要があると思います」

洸「うっちー、電話参加してもらいましょうか？」

谷岡「体調が問題ないようなら、参加してもらったほうが良いかもしれないわね」

洸「電話してみます。（と電話をかけると）あ、もしもし、うっちー。お疲れ様です。そうそう、今運営会議やってるところで、もしうっちーが参加できそうなら、このまま電話をスピーカーにするから、一緒に参

加してほしいんだけど。うん、分かった。ちょっと待ってね。（と一同に）うっちー、参加できるそうです」

と、スマホをスピーカーにして、机に置く。

洸「うっちー、話しても良いよ」

と、洸のスマホから雅也の声が聞こえる。

雅也の声「皆さん、お疲れ様です」

佐代子「うっちー、大丈夫ですか？」

雅也の声「皆さん、大変ご心配をおかけしております。体調面では問題ないんですが、味覚と嗅覚が全く分からない状態になってます」

住吉「うっちーさん、お疲れ様です。住吉です。感染経路は弟さんからって伺ったんですけど、スリジェネアカデミーでのほうが大丈夫なんでしょうか？」

雅也の声「はい。その件なんですけれど、先日の稽古の時、僕を始めメンバーのみんな、

それから講師の先生方、皆さんマスクや消毒、換気、ソーシャルディスタンスを常にやっていました。また、陽性者として確認された日からさかのぼって二日前に会った人以降が濃厚接触者の定義になります。これは、保健所の方に確認しました。なので、この定義で言うと、僕が陽性と分かったのが一月十三日なので、十一日以降で僕と会った人が濃厚接触者になります。スリジェネアカデミーがあったのが、一月九日なので、アカデミーのみんなや当日の講師の先生方はセーフになります」

本村「じゃあ、本当にギリギリだったんだ」

雅也の声「危うくアカデミーのみんなに迷惑かけるところでした。それに、住吉先生のスタジオだって消毒対応等に追われるようなことになったかと思うと、大惨事になるところだったなと実感してます」

住吉「うちのスタジオのことは良いんですよ。ただ、うっちーさんがこうしてコロナにな

ったでしょ。一年近く経って、少しコロナに対しての緩みがあったんじゃないかと思ってるんですよ」

譲治「演劇のレッスンでも、マスクをしてたし、俺たちは大丈夫だって分かれば問題ないよ」

雅也の声「国立感染症研究所感染症疫学センターの『新型コロナウイルス感染症患者に対する積極的疫学調査実施要項』には、『手で触れることのできる距離（一メートル）で、必要な感染予防策なしで患者と十五分以上の接触のあった者』って記載があるんです。レッスンではずっと、感染予防策は取ってましたし、一回通しをするたびに換気や消毒もやってましたから、そこは問題ありません」

理絵「じゃあ、あの時みんながちゃんと感染対策をしてたから、私たちはうっちーの濃厚接触者にならなかったってわけだ」

美穂子「されどマスクと消毒ってことですね」

雅也の声「本当にそうです。もし、あの時誰か一人でもマスクをしてなかったり、感染対策をちゃんとしてなかったら、それこそアカデミーでクラスターが起きてたかもしれません。特に子どもたちが感染したら、学校にも行けなくなります。まあ、僕がコロナになってしまったことで、いろいろお騒がせはしてますが、皆さんの感染防止対策が大惨事を防いだんです。言わば、不幸中の幸いということで」

佐代子「そうですか。でも本当、大事にならなくて良かったです。特効薬があるわけでもないので、完治という言い方が正しいかどうか分かりませんけど、うっちー、まずはしっかりと休んでくださいね」

雅也の声「はい、ありがとうございます」

佐代子「先生方におかれましては、引き続き、コロナへの感染防止対策を徹底してください。今回のうっちーのコロナ感染を教訓として」

一同、黙ったまま頷く。

9　木内家・居間

雅也と真保が話している。

雅也「え、健が？」

真保「うん。今ＬＩＮＥが来て、呼吸が苦しくなったから病院に行ったんだって。けど結局薬も何もないでしょ。だから、病院で診てもらって、すぐホテルに戻ったんだって」

雅也「入院はできないの？」

真保「ベッドの空きがないんだってさ」

雅也「じゃあ、落ち着くまで何もできないってこと？」

真保「そういうことになるわね」

雅也「……」

10　ホテル・一室

激しく咳き込みながら休んでいる健次郎。

N「中等症になり、一時は危ぶまれた弟の容態でしたが、数日すると元に戻り、自宅療養となりました。ですが逆に、母の体調が悪化したため、入れ替わるように今度は母がホテル療養となりました」

11　木内家・居間

雅也が台所で食事の支度をしている―

―孝志がソファーで横になって休んでいる。

N「僕の味覚障害と嗅覚障害は四日で治りましたが、今度は父が味覚障害となってしまいました。自宅療養の約二週間を過ぎた後も、大事を取って僕は月末まで仕事はリモート対応をし、スリジェネアカデミーのレッスンも休むことにしました。また、父も会社のガイドラインにより月末まで自宅待機が続く状態が続いていました」

12　同・事務所（夕）

雅也が仕事をしている――スマホに着信がかかってくる。亜里沙からである。

雅也「（電話に出て）もしもしアリサ？　どうしたの？　え、ああ、ごめんね心配かけて。うん、元気だよ」

13　公園（夕）

亜里沙がスマホで話している――隣でアイスを食べている隆太。

亜里沙「良かった。お母さんから、うっちーがコロナに感染したって聞いて、心配してたの。香奈枝もね。うん、レッスンはみんなで楽しくやってるよ。ちなみに、今りゅーた、目の前でアイス食べてる」

雅也の声「アイス食べてるの？　こんな寒いのに」

亜里沙「（隆太に）こんなに寒いのにアイス食べてるのかって」

隆太「だって、美味しいんだもん」

亜里沙「（雅也に）電話変わろうか？　うん、

良いよ。（と隆太にスマホを渡して）はい、うっちーから」

隆太「（緊張気味に）もしもし、りゅーたです」

14　木内家・事務所（夕）

雅也がスマホで話している。

雅也「りゅーた、元気にしてる？　うん、こっちは大丈夫だよ。二月に入ったら、復帰するよ。え、そりゃもう大変だよ。外出られないし、人にも会えないでしょ。ストレス溜まっちゃうよ。りゅーたも、学校でクラスターにならないように気を付けてね。三学期が終わったら、りゅーたも中学生になるんだし、最後の三ヶ月、まあコロナのこともあってクラスの友達とワイワイするわけにはいかないと思うけど、小学校生活最後の思い出はちゃんと作らないとね。うん、アリサに変わってくれる」

15　公園（夕）

亜里沙がスマホで話している――アイスを食べている隆太。

亜里沙「もしもし。うん、そうなんだ。良かった、じゃあ二月のレッスンからは、また来れるんだ。（笑って）そうだよね、どうしてりゅーたって、うっちーと二人になると敬語なんだろうね。まあ良いじゃん、それがりゅーたの可愛いところなんだから。うん、香奈枝にも伝えとく。元気にみんなで舞台に立ちたいもんね。じゃあね、はーい（と電話を切る）」

隆太「良かったね、うっちー二月から来れるみたいで」

亜里沙「そうだね。てか、何で敬語なの？」

隆太「分かんない」

亜里沙「あ、もうこんな時間。帰ろうか」

隆太「うん」

16　木内家・事務所（夜）

雅也が台本を読んでいる。

N「自宅療養の後、月末までリモート対応をしていた僕ですが、やはりリモートだけでは対応できない仕事もあり、その間は四月の成果発表会に向けてセリフを覚え、自分なりの演技プランを考えていました。また、コロナ感染のため延期になった横田監督の自主映画の音の収録も二月初旬に早々に行うことが決まり、こちらも完成が間近になっていました。改めて、コロナという見えないウイルスがいかに厄介で、面倒で、様々なものを混乱の渦に巻き込む存在であるということを実感したのでした」

つづく